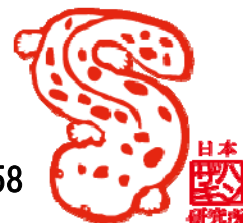


日本

# ハンザキ研究所ニュース 2010(10) : 通巻 No. 58



発行2010年10月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

## バード・ウォッチング

空飛ぶ鳥の姿を見て種名が分かれば素晴らしい。姿が見えなくとも鳴き声や落ちている羽からでも種名が分かるとうれしい。ハンザキ研周辺には民家無く、野生の生き物達にとっては住み心地のいい環境だろう。しかし、5年前から危ない？人間が常駐するようになり、その人影を見るとさっと飛び去ってしまう。申し訳ない限りだが、危険を及ぼすことは無いので何とか慣れてほしいと願っている。これまでで最高の出会いはヤマセミだ。窓の外、1羽ほどの所に止まっていた純白の冬の装いのヤマセミと目が合ってしまったのだ。驚いたヤマセミは冠羽を逆立てて飛び去っていった。この個体も一羽になってしまい3年以上シングルのまま。素人の私には鳥の名が分からないが、10種ほどの死体を拾い集めてコレクションにしている。窓ガラスに当たって落ちていたものがほとんどだ。



標識を付けたホオジロの放鳥

24日のウォッチングでは、ホオジロのペアの標識放鳥が日本野鳥の会の脇坂レンジャーの手で実演された。当日は環境省の許可の旗が朝早くに河原に掲げられていたので驚いた。それは霞網による捕獲の許可証だった。脇坂講師は朝早くに網をセットして捕獲したホオジロを布袋に収容しており、参加者の目の前で標識付けを見せてくれた後に放鳥した。この鳥が何年間生きているのか？移動は？などのデータが得られると素晴らしい。地道なこのような調査が多くレンジャーの手によって日本各地で試みられているのだ。参加者は始めてみる標識付けに興味津々、ちょっと変わったバード・ウォッチングでしたが脇坂先生のやわらかい語り口と共に印象に残ったことでしょう。





写真1 カラスに突かれていたハンザキ (○内が卵)



写真2 ヒメコウゾの枝



写真3 シカに食われていたタケニグサ



写真4 卵の重量を測定中



写真5 日本工科専門学校生によるワサビ田作成実習



写真6 鳥類標識調査の許可書

## 円山川水系におけるオオサンショウウオ事情 ③

会員 加賀見 省一 (但馬国府・国分寺館長)

少し前の話ですが2008年9月2日午後1時すぎに、市民から「出石町寺坂の出石川支流でオオサンショウウオが動けなくなってカラスに突かれていますので助けてやってほしい」という連絡がありました。この日は午後から会議があったために、但東町にある日本・モンゴル民族博物館に対応を依頼、保護してもらうことにしました。保護には、昨年亡くなられた金津匡伸館長とY君が駆けつけてくれました。

翌日に話を聞くと、場所は“栗谷川”で出石川の合流点から150m上流です。川はコンクリート三面張りで水深は数cm程度、写真1で見ても体のほとんどは水面から出ているのがお分かりいただけると思います。首と背中の中中央部には、カラスにつつかれてできた傷があります。また、胸部も穴が開いたようになっていました。職員が駆けつけた時には皮膚が乾燥して虫が寄ってきていたということでした(写真は水を掛けてから撮影)。また、卵を放出しており、かなり衰弱していて動くことができない状況だったようです。やむなくモンゴル博物館の大型水槽に川から水を汲み上げて一時収容しました。3日後にはかなり元気になったために栗谷川が出石川に合流する場所に放流しています。なお、水槽内でも卵を放出しており多くの卵を確認することができました。

このオオサンショウウオは全長635mm、体重2006gで四肢の指の欠損はありませんでした。マイクロチップは挿入されており00066FF211のNo.338個体で、出石川の災害復旧工事に先立って2005年10月19日(全長595mm、体重1.30kg)に出石町日野辺で保護され、2008年5月26日(全長660mm、体重2.45kg)に放流された個体であることが分かりました。

豊岡市教育委員会文化振興課(文化財保護担当)では、日本・モンゴル民族博物館と但馬国府・国分寺館でマイクロチップならびに読み取り機、計測に必要な道具を用意していますので、市内で保護が必要な場合にはどちらかの職員が現場に駆けつけることができればチップ番号の確認や挿入が可能になっています。また、兵庫県豊岡土木事務所の協力をいただき、今までの調査や保護でオオサンショウウオに挿入しているマイクロチップの番号や捕獲場所、日時などのデータを教えていただき、市の担当課の職員であればパソコンで見ることができ、すぐに検索が可能です(入力数530件)。

故金津匡伸さんは、モンゴル大使館の外交官を経て但東町に移られ日本・モンゴル民族博物館の建設から管理運営に尽力されました。また、自然や文化財保護にも熱心に取り組まれオオサンショウウオも例外ではありませんでした。二人でオオサンショウウオの保護について話していて、マイクロチップの挿入方法を教えてもらおうということになり、ハンザキ研を訪れたことが昨日のように思い出されます。「金津さん、オオサンショウウオの保護については責任を持って後継者育成をしますのでもうどうか安心してお休みください」(参照“博物館のオヤジがんばる—金津匡伸氏追悼文集—”2010)

## これまでのニュースの中の“？”に対する答え ①

チョウモドキ (ハンザキ研ニュースNo.32, P. 4 “ウオジラミの一種” 参照)

通称“魚虱 (ウオジラミ)”は、昔からコイやキンギョの養殖場で知られた厄介な寄生虫です。魚の体の表面にピッタリ張り付いて宿主から養分を吸って生きています。目玉のように見えるのは吸盤で、黒い小さな点が眼です (当ニュースNo.32 の P. 5, 写真 6)。コイなどは比較的暖かい水に住んでいますが、アマゴやニジマスなどの冷水性の魚にも同じような寄生虫が付いていることが発見されたのはかなり前のことのように思います。私の大学の後輩であった故・志村茂さんが研究していたので、サンプルを届けたことがありました。しかし、長い時間が経っていたのでその名をすっかり忘れていたのがこのチョウモドキでした。

収容しているハンザキの餌として養魚場からアマゴやニジマスを購入しており、見学の皆さんからは「贅沢な！」と異口同音の言葉が発せられます。しかし、大量のハンザキにコンスタントに一定量の餌として供給できるものは養殖魚しかありません。それに毎日同じ餌 (食事) では飽きてしまい、人間だったら文句を言い出すことでしょう。私の口の悪い友人は「毎日これらのアマゴを間引いているのだらう (酒の肴として)」と決め付けてきますが、ハンザキのピンはねはいたしておりません。

ニュースNo.32 を読んで、富山市衛生研究所の山内健夫博士が、広島大学の長澤先生を紹介してくれました。山内さんは、私が島根県立宍道湖自然館にいた時に、ホシザキ野生生物研究所の研究者として自然館の二階で研究に励んでいた時からの知人です。長澤先生はすぐに飛んでこられました。チョウモドキのきちんとした標本や発生の報告はほとんど無いのだそうです。夏になると当研究所のハンザキ・プールに限らず県内各地のアマゴ養殖場で大発生しては甚大な被害を発生させているのです。全滅してしまった業者もあるくらいの猛威をどうしようもなく見過ごしている現状だそうです。水族館時代には劇薬の農薬を使用して駆除していましたが、食用には使えない薬品とのことでお手上げの現在だそうです。

長澤先生は、さっそく“本州西部で採集されたチョウとチョウモドキ” (2009) という報告書を世に送り出されました。何の仲間なのか分かりにくい生き物ですが、甲殻類でありエビやカニなどに近い動物で、チョウ目チョウ科に属し日本では 2 種が知られているそうです。当所のオオサンショウウオ保護センターで採集されたチョウモドキは国立科学博物館に保管されることになったそうです。ちなみに本種は西日本では島根県高津川のゴギ (イワナの地方種) に寄生していた報告があるのみだそうです。しかし、兵庫県内水面漁業センターの話では多くの養魚場で被害が多発していると言うことでした。私も数十年前にニジマス養殖場からサンプルを得ていたのですから、何とも複雑な気持ちです。このような情報が研究者にすぐに伝わるような仕組みができていれば研究もドンドン進むのではないかと思います。



## ヒメコウゾのいい加減な葉っぱ

構内に生えている植物は、素人の私にでも軽く 100 種は超える数を確認できます。気を付けて見ているとドンドン数が増えていきます。先日窓の外の雑木に変な葉っぱを見つけました。今までは草刈ボランティアによって刈り払われていたために気付かなかったのでしょうか。写真 2 を見てください。切れ込みの無い普通の長楕円形の葉があるかと思えば片側だけ切れ込みのある葉、両側にあるものなどが一本の枝の両側にランダムに並んでいます。一体なんでこんないい加減な好き勝手な葉型になるのでしょうか。植物学の世界ではどのように説明されているのか気になるところです。どなたか教えてください。

コウゾはミツマタと共に昔からよく知られた紙の原料です。ヒメコウゾは古くから皮を繊維として利用されており、綿が渡来するまでは麻と共に重要な繊維であり、漢字で書くと“栲”と書かれ“たへ”又は“たく”と呼ばれて布の代名詞だったそうです。「・・・夏来るらし白たへの衣乾したり天の香具山」と万葉集に持統天皇が詠んでおられるよしです。(いにしへの草木、井上俊 神戸新聞より引用)

このヒメコウゾ以外にも、秋になって黄色の鮮やかな花を見つけましたが“ヤクシソウ”だということでした。真っ赤なマンジュシャゲ(彼岸花)も黒川地区で初めて校庭で咲きました。今までは移植を試みたのですがうまく根付かなかったそうです。

.....

## シカの生き残り戦略

兵庫県ではシカが増えすぎて食える植物を全て食い尽くしそうな勢いである。“暗い森”と称されていた植林地帯の地面には下草が無い。光が入らないために植物が育たないのだ。しかし、ハンザキ研の周りの落葉広葉樹林の下草もなくなっている。ササも冬に積雪から出ている先端部をシカに食われてしまうので枯れている。地面に生えていた種々の植物もほとんど食い尽くされて茶色の地肌が出ている。残るのは毒草やススキ、タケニグサや外来植物だけだと言われていた。

ところが、ススキやタケニグサまで食われている跡を見つけたのだ。ススキは水族館時代にソウギョの餌として束ねてプールに沈めて観客を驚かせていたので、シカがなぜ食わないのかと不思議に思っていた。タケニグサは、茎を折ると茶色の汁が出てくるが、小学生時代にはこれをふくらはぎに塗ると早く走れると言って、運動会の日には多くの子供も塗りつけていたものだった。しかし、いかにもアクの強そうな汁が出てくるこの草までも食われている跡を見つけてびっくりした。食っている所を見たわけではないので確信は無かったが、他の人からも同じ話を聞いたことと上からバツサリと食った状況は大型の動物と言うことで、シカしかいないと考えられる。

兵庫県では昨年より 1 万頭増やした 3 万頭を駆除目標にしたと言う。それでもシカの数には減りそうも無い。ハンターの方が絶滅危惧に瀕しているからだと言う。

## ハンザキ研日誌

2010年10月

- 1日 日本オオサンショウウオの会・副会長岡田 純博士、簾野地区で調査
- 2日 日本工科専門学校生実習（建屋川と簾野の人工巣穴視察）
- 5日 ・姫路市役所・清水邦一さん来所  
・岡田 純博士、簾野の調査に来所  
・カモガワ・ハンザキにも伝染性腫瘍初発生、1個体
- 9日 日本野鳥の会の脇坂レンジャー他3名来所、24日の下見に
- 10日 ワサビ田作成中に脚立より落下、右脇腹打撲、右手首捻挫
- 11日 5ヶ所下流の榊谷でクマ目撃の情報あり（生野町内で6件）
- 12日 ・ハンザキ月例健康診断  
・簾野の人工巣穴の卵数チェック、約2,000粒3～7メスの産卵か
- 13日 円山川水系自然再生推進委員会技術部会開催、豊岡市にて
- 16日 ひょうごエコフェスティバル三田市有馬富士公園にて、出展～17日
- 21日 YTV取材打ち合わせ“廃校の変わった活用”
- 23日 岡田 純博士、簾野調査に
- 24日 バードウォッチング開催、脇坂講師の標識付け実演など17名参加
- 25日 電話故障する、静かな環境になって素晴らしい
- 26日 YTV取材
- 28日 上水貯水槽空っぽになる、ボールタップ故障取替え
- 30日 日本工科専門学校生実習に来所、ワサビ田完成
- 31日 ・NPO事務局会議、7名  
・会誌あんこう5号、ハンザキ研ニュース56・57発送

## ハンザキ所長のツブヤ記録

今月はダウンでした。10日にワサビ田を作ろうとして作業中に、脚立から落ちました。単管で寒冷紗を掛ける骨組みを組み立て中のことです。足元は十分に気をつけてバランスを取ったのですが、単管の重みが加わって脚立の脚が地面にめり込んで倒れました。脚立は向こうの方へ倒れ、私は右わき腹をエンビの樋に強打、たかが1mほどの高さからでしたが、「グエッ」と叫んで息が止まりました。泥水の中にへたり込んでしばし、脇腹と右腕を押さえつつ冷や汗を流しながら立ち上がりました。肋骨を押さえ、右手の指を動かしてみても骨折は無いと診断しました。それから3週間、まだ痛みが消えません。途中、外科のX線検査では、骨は折れていませんでした。ドクターから「丈夫な骨だ」とお褒めを頂きましたが、何もできない、利き手が使えない不自由さを思い知らされました。それでも幸いなことは、その間もビールが旨かったことです。旨く飲める内は元気なのでしょう。

(本誌は「三井物産環境基金」の助成を受けて作成しています。)